

【感覚過敏について】

◆感覚過敏は、自閉症を含む発達障害のある人が訴えることの多い症状。

◆厚生労働省の H28 年度の調査では自閉症を含む発達障害者は推計 48 万 1 千人。

https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/seikatsu_chousa_list.html

厚生労働省 平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）

◆感覚過敏は、脳梗塞・脳卒中など疾患、事故による受傷などで脳の器質的病変を負った場合にも発症することがある。

◆感覚とは

- ・視覚 ・聴覚 ・触覚 ・嗅覚 ・味覚
- ・固有受容体覚（からだの位置や、力の入れ具合感じる感覚）
- ・前庭覚（からだの傾きや回転などを感じる感覚）など

◆感覚過敏、感覚異常は複数の症状を伴うことが多い。

【撮影について】

◆視覚過敏の人が通常の撮影ができない理由 ベスト 5

- ①ふつうの部屋は明るすぎてサングラスや遮光眼鏡など目を保護するものが必要
- ②一般的なスタジオは家庭の部屋より明るく、ストロボを使うのでメガネなどを使用してもつらい。
- ③カメラのストロボ（フラッシュ）は突き刺さるように痛い。
- ④明るすぎる場所や強い光で視界が真っ白になり、何も見えなくなるので怖い。
- ⑤スタジオ内にカラフルな撮影小物や動き回るスタッフがいると刺激が大きく気分が悪くなる。視覚からの情報量が多すぎ、脳がすぐに疲労。集中力もなくなり落ち着かない。

◆スタジオグレイスの撮影方法 8つの特徴

- ①撮影前にしっかりと症状や困っていることを聞いておく。
- ②スタジオ内の照明をすべて消し、個人の症状に合わせ、小さなスタンドライト2～4個を使用。被写体を直接照らさず、壁や天井に向け、間接的に使う。光源は直接見えないようにする。
※一番暗い時で、スタジオ内の明るさは映画館くらい。(被写体にあたる照度は0.7ルクス)
- ③スタジオ内の色は白で統一、余計な物は置かない。
- ④撮影時のスタジオ内スタッフはカメラマン1名(必要に応じて介助者も入室)
- ⑤突然誰かが扉を開けるなど、急な明るさの変化は負担になるためスタジオ外にもスタッフ1名配置。
- ⑥スタッフの動きはゆっくり。
- ⑦こまめに声をかけ、つらさ、こわさ、疲労がないか確認。疲れた時には、ひとり、または親子で休憩できる個室を用意。
- ⑧撮影するのは同じ障害を持つカメラマン。体感しているからこそできる配慮と対処で安心の撮影。

【明るさ、光の量について】

◆照度の目安参考数値

- ・晴れた日中の直射光→100,000ルクス
- ・冬の日中の太陽→50,000ルクス
- ・部屋の窓際→2,000ルクス
- ・居間の照度→150～300ルクス
- ・読書→300～750ルクス

◆当写真館で行う「暗がりで行えるスタジオ撮影」の照度

- ・スタジオ内の照明を消し、まぶしくないようにカバーを付けたスタンドライト2本点灯した場合、被写体位置から測定した明るさ=0.7ルクス

※スタジオ内天井照明点灯(ストロボは無し)=360ルクス

※スタジオ内照明すべて消灯=0.02ルクス

※視覚過敏者を対象にした撮影=0.7～16ルクス

個人の許容範囲に合わせ、明るさ・暗さは調節